

第1章 総説



1 那覇市の概況

位置と気候

那覇市は沖縄本島の南部にあり、東シナ海に面し、東経 127.41 度、北緯 26.13 度に位置する県都である。地形は、旧市内を中心とする中央部においてはほぼ平坦をなし、これを取り巻くように周辺部には小高い丘陵地帯が展開し、東西に 10.9km、南北に 8.0km、総面積は 41.5 k m²である。

亜熱帯モンスーン地帯に属する沖縄県の気候は、四季を通じて温暖で、年間の平均気温は 23.8℃※、平均湿度は 76%※であり、春から夏にかけては雨量が比較的多く、夏から秋にかけては毎年数個の台風が襲来している。
(※の数値は 2016 年～2025 年の平均値 気象庁ホームページより)

人口と産業

大正 10 年に市制が施行されたとき 63,000 余人であった那覇市の人口は、以後徐々に増加を続けていたが、昭和 19～20 年の沖縄戦で市域の 90%を焼失し、8,000 余人に激減した。終戦後、那覇市は米軍の全面占領下におかれ、立入禁止区域となっていたが、昭和 20 年 11 月に産業復興の名目で陶器製造産業先遣隊が壺屋地域一帯に入域して以来、民政府など中央機関が那覇に移転し、旧那覇市街が漸次開放されるようになり、市民の活動も活発になってきた。昭和 29 年に首里市と小禄村、昭和 32 年に真和志市と合併し、一挙に 186,000 余人となり、新しい那覇市建設の基盤ができた。現在の人口は約 313,000 人、平成 25 年 4 月 1 日には県内初の中核市へ移行するなど、県都として沖縄県の政治、経済、文化の中心として発展している。

本市の産業構造は、第 3 次産業の比率が非常に大きく都市型構造となっている。現在、観光産業の充実、中心市街地の活性化、地場産業の振興等のための環境整備が進められている。

那覇市の教育行政の歴史的特色

本市は、「大和ぬ世からアメリカ世、また大和ぬ世」といわれる数奇な歴史を歩んできた。その中でも教育行政においては、アメリカ施政権下の影響を受け、全小学校に幼稚園が併設されるなど、沖縄の歴史的背景をもち、他とは異なる特色を有している。

2 那覇市管内別人口（登録 人口）

令和 8 年 4 月末時点

区 分	世帯数	人 口		
		総数	男	女
本 庁	55,774	98,682	47,538	51,144
真和志支所	54,427	101,567	49,022	52,545
首里支所	25,559	54,643	25,814	28,829
小禄支所	28,366	57,361	28,630	28,731
合 計	164,126	312,253	151,004	161,249

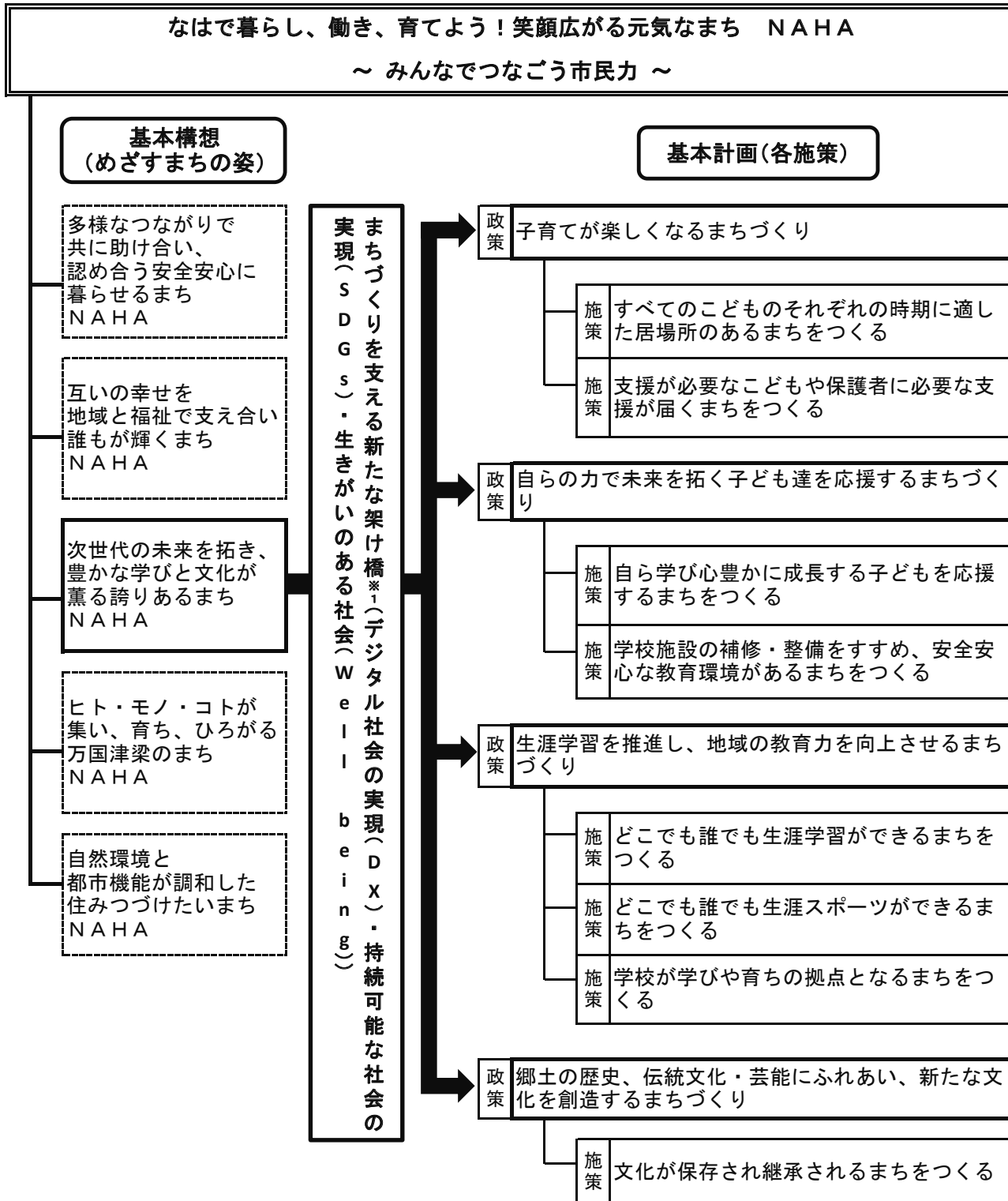
※住民基本台帳法の改正（平成 24 年 7 月 9 日施行）に伴い、外国人住民も含む。

3 第5次那覇市総合計画体系（令和6年一部改訂）

第5次那覇市総合計画（令和6年一部改訂）

（基本構想・基本計画）

【まちづくりの将来像】



※ 第5次那覇市総合計画（令和6年一部改訂）より教育分野に関する政策・施策を抜粋

※1 未来への視点を補完する新たな視点として、令和6年一部改訂にて新たに追加された項目。
全ての施策を遂行する上で、それぞれの視点を強く意識する。